

# 「新型コロナウイルス感染症の教育実習への影響」

—実習生の意識面・行動面の変化を中心に—

## 研究の概要

### ◆課題認識

- 新型コロナウイルス感染症（以下新型コロナ）の影響より“3つの密”を避け、手洗いやマスクといった基本的な感染対策に学校現場は追われた。
- また教育実習も感染対策を取りながら行う必要があり、実習生にも様々な制限が課せられた。

### ◆研究の目的

- 新型コロナが、実習生の健康面や実習に対する不安や取り組みに与える影響を調査した。
- その結果をもとに実習の事前指導の内容を改善するとともに、実習が充実し教員として働くことへの自覚が強くなることが期待できる。

### ◆研究の方法

- 令和2、3年度ともに質問紙や心身両面の健康状態を測定するGHQ28を用いて、8月の事前指導時には新型コロナに対する不安などを、9～10月の実習終了時には体調の変化や実習における行動の変化などを調査した。

## 調査の結果・まとめ

### ◆調査の結果

図1：令和2年度は新型コロナの影響で不安や抑うつの上昇・社会的活動の制限がみられたが、翌年には新型コロナ流行以前の水準までほぼ戻った。身体症状は2年連続低下した。

図2：令和2年度実習前後の「新型コロナに罹る不安」と「うつす不安」を比較したが、両者に差はなく実習後に低下していた。

- 他の令和2年度の結果では、①感染対策の印象では「もう少し厳しくていい」というものが59%と最も多かった、②「もっと厳しくした方がいい」というものは、実習前の不安も高く実習後の不安の低下も少なかった、③感染対策が困難な理由には、生徒との距離の取り方への迷いや戸惑いを記載したものが多かった。

図3：実習前の「新型コロナに罹る不安」と「うつす不安」は、令和2年度と比較して3年度はともに低下しており、両者に差はなかった。

図4：実習後の体調変化を比較し、新型コロナ流行以前の令和元年度より「一日以上の休みの者」が増加していたが、全体では体調に変化のない者が年々増加していた。

- 「体調に変化があった者」の具体的な内容は、身体面でかぜ症状が減少しており、メンタル面・行動面は例年と差が無かった。

図5：令和3年度は、児童生徒との触れ合いの時間・距離とも足りていないという印象を持つ実習生が大半であった。

- 他の結果では、①新型コロナ対策に応じた行動が出来た者の割合が令和2年度に比べて3年度では増えていた、②令和3年度の新型コロナの影響としては、体調管理には85%が影響なく、44%が教員との連携に、71.5%が実習の充実度に影響があったと回答した。

### ◆まとめ

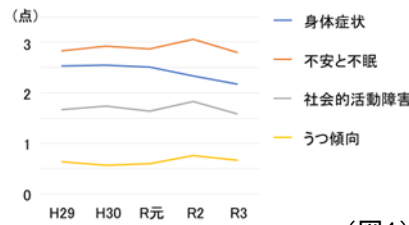
- 令和2年度に新型コロナの影響で高まっていた身体症状・不安などの健康面や実習への影響は、令和3年度には新型コロナ流行以前の水準まで戻り、身体的な負担はこの2年間低下傾向であった。
- 感染症対策は、児童生徒との触れ合いや指導教員とのコミュニケーションなど人との交流に影響を与えていた。

## 今後の課題

### ◆人との関わり・コミュニケーションへの支援

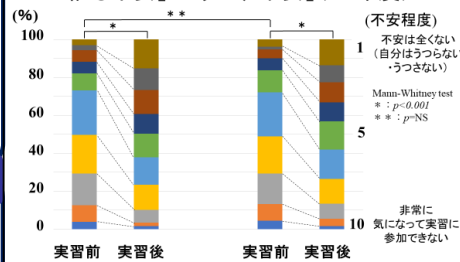
- 感染症対策下での効果的な生徒とのかかわり方の指導

### GHQにおける各因子の得点変化



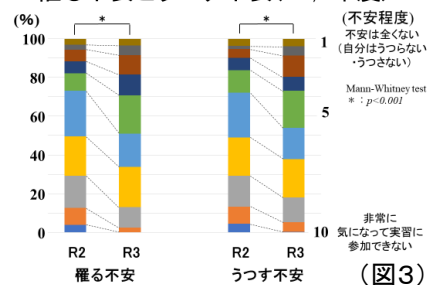
(図1)

### 実習前後の新型コロナウイルス感染症に「罹る不安」と「うつす不安」(R2年度)



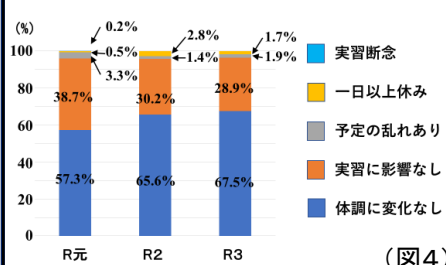
(図2)

### 実習前の新型コロナウイルス感染症に「罹る不安」と「うつす不安」(R2,3年度)



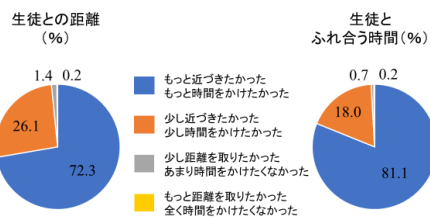
(図3)

### 実習後の体調変化と実習への影響



(図4)

### 新型コロナウイルス感染症流行下での児童・生徒とのふれ合い



(図5)